

Bauma2013 開催



第93号
 発行所 酒井重工業株式会社
 住所 東京都港区芝大門1-4-8
 電話 03-3434-3401
 FAX 03-3434-3419
 発行人 加藤 孝

世界三大建設機械展示会である「Bauma (バウマ) 2013」が4月15日～21日の7日間、ドイツ (ミュンヘン) で開催されました。今回は、世界53カ国から3,256社 (ドイツ国外は1,948社) が555,000m²の展示面積で最新の建設機械を紹介していました。これは、前回の37カ国、1,858社、230,000m²に比較し、

飛躍的に拡大しており、総来場者数420,170人と前回比270%を考慮すると、最も充実したビジネスの場として発展してきていると言えます。

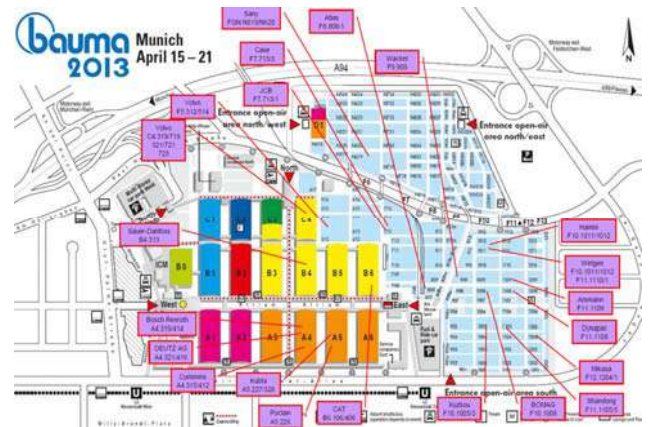
締固め機械に着目すると、最新の排ガス規制エンジンである通称暫定4次規制対応エンジン (欧州規制では Stage-IIIB、北米規制では EPA-Int.Tier4) を搭載した車両が既に開発完了しています。また、近年のトレンドである低燃費対策としての ECO (エコ) モードの充実等が目立ちます。更に最新技術としてのハイブリットシステムのモデル車両の展示や IT 施工関連の締固め管理装置の提案も世界最先端を表現するに足る展示内容でした。

各メーカーの技術としては、例えば、前後進プレート等の小型締固め機械に標準で装備されている締固め管理装置や舗装端部ギリギリまで転圧可能なロールのサイドフレームが片持ち支持構造の搭乗型締固め機械、あるいはアナログ式とデジタル式を融合させた運転席パネル (計器板) 等が特筆すべき技術と感じました。また、ある締固め機械メーカーでは、土工用振動ローラのラジコン (全長1,000mm×全幅500mm) のデモンストレーションを行っており、遊び心の余裕も必要と感じました。

今後は、グローバル企業を目指す我々酒井重工業も早急に欧州展示会に名乗りを上げ、世界のお客様に当社製品の良さを分かって頂く様に活動していく予定です。



ドイツ ミュンヘン



展示会場の配置



土工用振動ローラのラジコン



展示風景

モンゴルレポート ～モンゴルの道路事情～

今回のレポートは、新規代理店へのサービストレーニングおよび客先訪問を行ったモンゴルを紹介します。モンゴル国は、人口約280万人（広島県の人口に相当）、面積は156万km²（日本の約4倍）で、東アジア北部に位置するウランバートルを首都とした内陸国です。東と南を中国・内モンゴル自治区、西を中国・新疆ウイグル自治区、北をロシア連邦とそれぞれ接しています。

ウランバートルへは、成田より直行便で5時間程です。到着間近、高度が下がっていくと、飛行機の窓からは、何もない茶色の世界が広がっていました。5月の雪解け間もない時期のため、大草原ではなく、砂漠の様な茶色の世界でした。



モンゴル国の位置



砂漠のような茶色の世界

空港からウランバートル市街までの道を走行すると、ひび割れがひどく、自然に開いた穴や補修工事中の途中の穴が至る所にあり、道路状態の悪さを実感しました。この舗装は、30～40年前にソ連が作った道路のようです。また、他のアジアの国と違い、オートバイ（スクーター）を見る機会がほとんどありませんでした。寒い時期が長いことと道路状態の悪さが原因で普及しないそうです。

客先訪問のためにウランバートルの南約300kmの町（マンダルゴビ：Mandalgovi）まで向かいました。ウランバートルからの約1時間は、状態が悪い一応舗装された道路でしたが、その後は、舗装されていない道となり、何の目印もなく、車の走った跡が道になるような、店もなければ、電線もない、大草原（この時期は砂漠）に入りました。飛行機の窓からの景色も感動しましたが、車窓から見る延々と続く広大な景色の『これぞモンゴル』という感じでした。ウランバートルから約4時間走った所でついに小さな町が現れ、客先の飯場に到着しました。



店も電線もない風景



ひび割れた舗装道路

客先の飯場は新規道路事業現場内にあり、コンテナハウスを事務所兼食堂にしていました。また、通常の生活はモンゴルの伝統的なゲルを利用していました。工事の進行に伴って、遊牧民のようにコンテナハウスやゲルごと移動していくようです。客先到着が昼時だったので、食堂にて麺と牛肉を炒めたツオイワン（モンゴル風塩味焼きうどん）を美味しくいただきました。



コンテナハウスとゲル



ツオイワン

何もない大自然の景色の中で広大な道路工事現場を見学しながら、町と町とを結ぶ道路整備プロジェクトによって物流が良くなり、この国が発展していくことを考え、この場所が10年後、20年後どのようになっているのか興味を持ちました。今後、新国際空港の建設、新規道路事業、ウランバートル市内道路整備プロジェクト等の大規模な工事が続くようなので、新規代理店と共に市場開拓を進めていきたいと感じました。



大自然の中の道路工事現場



果てしない道路工事現場

※ マンダルゴビ：ゴビ砂漠の辺境に位置するドンドゴビ県の県都で人口1万人程（2007年調べ）。

(Mandalgovi)

- ※ ゲル：主にモンゴル高原に住む遊牧民が使用している伝統的な移動式住居のこと。日本では、中国語の呼び名に由来するパオ（包）という名前でも呼ばれることも多い。円形で、中心の柱（2本）によって支えられた骨組みをもち、屋根部分には中心から放射状に梁が渡され、これにヒツジの毛でつくったフェルトをかぶせ、屋根・壁に相当する覆いとする。
- ※ ツオイワン：牛肉や野菜が沢山入った、五目焼うどんのようなもの。特徴は、麺を作る際に小麦粉を練って伸ばした生地を一度蒸してから細く切って野菜と共に炒めるところ。

ある町この道シリーズ⑰ ～さきたま緑道～

埼玉県鴻巣市にある当社の関東営業所近くの赤見台近隣公園から武蔵水路に沿って、さきたま古墳公園に至る道はさきたま緑道（全長4.5km、幅員25mの遊歩道と自転車道）と呼ばれ、木立ちに囲われ、よく整備されていて、休日には散歩やランニング、自転車で走る人の憩いの道となっています。

この“さきたま”という名称は“さいたま”の元となるもので奈良時代に編纂された『万葉集』には、「前玉（さきたま）」や「佐吉多万（さきたま）」などと地名を表記した和歌が収められており、さきたま古墳公園内には「前玉（さきたま）神社」もあります。さきたま古墳公園には今から1300年から1500年位前に建造された古墳が、大きなものだけでも9基あり、特に有名なのは昨年公開された映画「^{おしじょう}のぼうの城」で豊臣秀吉と小田原北条氏の戦い（小田原の役）の一貫で石田三成がこの近くの忍城を水攻めにした際に本陣を築いたとされている「丸墓山古墳」です。直径が105m、高さが18.9mもあり、日本で一番大きな円墳と言われています。

さきたま古墳公園から少し行田駅方面に向かった所に前述の忍城と水攻めの跡を思わせる水城公園があります。映画が公開されてから俄然人気が出た為、忍城では週末に行田市が結成した「おもてなし甲冑隊」なる人達が映画の主人公になりきってパフォーマンスを演じています。映画には出てこなかったのですが、忍城には天守閣もありちょこなんとしており、綺麗なお城です。



水城公園

さきたま緑道からほんの少し外れますが、ここにも石田三成が水攻めの為に築いた「石田堤」（当時総延長28kmにもおよんだ）が残っていて、ここまで石田三成がやって来たんだと思うと、歴史とは無縁と思われた田畑が広がる風景にも何やらロマンを感じてしまうから不思議です。



さきたま緑道



丸墓山古墳



石田堤

※「忍城」は、戦国時代に熊谷近辺から台頭した成田氏によって築城されたもので、北は利根川、南は荒川にはさまれた扇状地にあります。石田三成の水攻めにも耐えたのですが結局開城し、江戸時代には徳川の譜代や親藩の大名が城主として入っていたようです。現在のように御三階櫓(ごさんかいやぐら)が完成したのは元禄7年(1694年)で名実ともに忍藩十万石の城としてのかたちを整いました。



忍城 御三階櫓(ごさんかいやぐら)